

# 知立 弘法さんかわら版

発行編集部

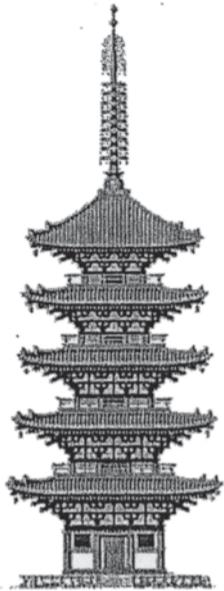
五月になりましたが、朝晩は寒い日もあります。ご自愛ください。

二〇二二年から「尾張名古屋・歴史街道を行く」杜寺城郭・幕末史―をお送していますが、今年も「古屋城下町を起点に広がる臨街道について」をお伝えしています。四月号と五月号を間違えましたので、今月は岩倉城と生駒屋敷についてお伝えします。

## ★岩倉城と織田家戦国史

尾張北部から庄内川沿いの小田井市場に名古屋城下町に供給する農作物を運び込む道が岩倉街道です。その途中、五条川西岸には岩倉城が聳えます。

岩倉城は文明年間(一四六九〜八七年)に岩倉織田氏(伊勢守家)の織田敏広が築城しました。岩倉城を拠点として伊勢守家は尾張上四郡(葉栗・丹羽・中島・春日)を支配していました。



は三里先から見えた」と記されています。一方、対立する清洲織田氏(大和守家)は南西方向にある清洲城を拠点に尾張下四郡(海東・海西・愛知・知多)を支配し、岩倉街道の南端には清洲系織田藤左衛門家の居城、小田井城がありました。

信長は一五五六年の稲生の戦いで織田弾正忠家の家督争いを制しました。その際、争った弟の末森城主信行を岩倉城主織田信安が支援しました。

そのため信長は、一五五八年、岩倉城北西の浮野で信安の跡を継いだ嫡男信賢と戦います(浮野の戦い)。清洲城から岩倉城へは三十町(約三キロメートル)ほどの距離ですが、信長は北上して岩倉城の背後の浮野に布陣しました。

信長は犬山城の織田信清の加勢を得ましたので、浮野に回ったのは北方から来る信清勢と合流するためだったとか、清洲城と岩倉城の間にある五条川を回避するためだったと伝わりまます。

浮野の戦いで敗れた信賢は岩倉城に籠城。翌一五五九年、信長は岩倉城を落城させました。

信長は、尾張守護斯波氏と対立した守護代織田大和守家を一五五四年の安食(春日井郡)の戦いで下して

尾張下四郡を制し、一五五六年の稲生の戦いで織田弾正忠家の家督争いを決着させ、一五五八年の浮野の戦いで織田伊勢守家(岩倉織田氏)に勝ち、一五六〇年の桶狭間の戦いで今川義元を破ります。

岩倉城は戦国史の真つ只中にあつた城郭と言えます。

一説に、浮野の戦いは一五五七年、岩倉城落城は一五五八年との説もあります。信長は一五五九年に上洛しており、岩倉城包囲中に上洛は困難との見方からです。

信長は將軍足利義輝から尾張支配のお墨付きを貰いに行つたと考えられますが、思惑通りには運びませんでした。尾張統一を完全に果たすのは、浮野の戦いで支援を受けた犬山城主信清を一五六五年に下してからです。

## ★小田井市場と岩倉街道

江戸時代になると、兵火によって衰退していた岩倉は復興し、岩倉街道沿いに町並みが形成されていきます。

一六一〇年に名古屋城築城と清洲越しが始まると、城下町への食料などの物資供給が課題になりました。家康は小田井市場を公認し、各地から野菜などが運ばれるようになり、賑わいました。尾張北部からの輸送路として重要な役割を果たしたのが岩倉街道です。

枇杷島橋を起点とし、終点は江南の小折、あるいは稲置(犬山)辺りです。岩倉から先の犬山までの道は犬山街道、柳街道とも呼ばれました。信長が道の両脇に柳を植えたことに

由来します。

## ★生駒屋敷

岩倉街道の北には生駒氏の館があります。後の小折城(こおりじょう)です。

生駒氏は大和国の武士でしたが、文明年間(一四六九〜八七年)に生駒家広が応仁の乱の戦禍を逃れ、尾張国小折に移住しました。

のちに小折を岩倉街道が通るようになり、生駒氏は馬借として財を成し、代々織田氏と関って家勢を拡大させます。最盛期には飛騨から東三河まで商圏を拡大しました。

やがて、生駒家宗の娘吉乃が織田信長の側室となり、長男信忠、次男信雄を産み、この頃に小折城が築かれました。

若き日の信長が岩倉街道を北上して生駒屋敷に通つた姿が目に見えられます。

一五八四年の小牧長久手の戦いで是最前線となり、城は大幅に改修されました。織田信雄が追放された後、家宗の子利豊が豊臣秀吉に任せ、関ヶ原の戦い後は徳川家康に請われ、清洲藩主松平忠吉に仕えるために尾張に残りました。

一國一城令によって小折城は廃城となりましたが、生駒家は在所持ちを許され、小折城は生駒氏下屋敷として幕末まで残りました。

## ★上街道(木曾街道)と

### 下街道(善光寺街道)

来月は上街道と下街道についてお伝えします。乞ご期待。



# 知立 耕平さんかわら版

発行編集部

大塚耕平事務所

☎052-757-1955

Kouhei@oh-kouhei.org



皆さん、こんにちは。5月で初夏のような日もありますが、朝晩は冷え込む日もあります。季節の変わり目です。くれぐれもご自愛ください。

かわら版では日常会話の中に含まれている仏教用語をご紹介します。知らず知らずのうちに使っている仏教用語。それだけ日本人の生活に溶け込んでいるということなのです。

仕事や勉強がうまくいったり、願いや目標が成就するかどうか、「それは他力本願だね」というような表現をすることがあると思います。「他力本願」も仏教用語です。言葉自体はよくご存知の方が多いかもしれませんが、本来の意味とは全く逆向きの使い方をされている場合が多いですね。

日常会話で使う「他力本願」は「人任せ」「成り行き任せ」というような意味で使われることが多く、「あの人は他力本願だ」と言うとは何となく否定的な(ネガティブな)人格を思わせます。ところが、仏教用語としての「他力本願」の本来の意味は全く異なります。

菩薩は修行中の身ですが、覚りを開くと仏(如来)になります。その昔、浄土真宗の開祖親

鸞さんは「大無量寿経」というお経を読む中であることに気がつきました。

阿弥陀仏が法蔵菩薩として修行をしていた時、自分が覚りを開いて仏になる条件(修行の結果として達成すべき目標)として「衆生(人々)を救う」という誓い(願い)を立てました。つまり「誓願」です。三月号でお伝えした仏教用語です。

法蔵菩薩が覚りを開いて阿弥陀仏になるためには誓い(願い)が実現することが前提です。したがって、阿弥陀仏が存在するという事は法蔵菩薩の誓い(願い)が既に実現したということ、つまり「衆生は既に救われている」ことになりす。

ずいぶん理屈っぽい話ですが、そのことに気づいた親鸞さんは「既に救われている」ことに感謝して念仏を唱えることを奨めました。つまり、阿弥陀仏(法蔵菩薩)の「他力」によって人々が救われているという「願い(本願)」は既に達成されているということなのです。

念仏は「南無阿弥陀仏」ですが、「南無(ナム)」のサンスクレット語の語源は「従います」「帰依します」という意味。つ

まり「南無阿弥陀仏」は「既に救ってくれた阿弥陀仏に感謝して帰依します」という意味になります。

親鸞聖人は自著「教行信証」の中で「他力といふは如来の本願力なり」と記しています。「他力」は「他人の力」ではなく「仏の力」「阿弥陀仏の救いの力」を指しています。

日常会話には「あの人は他力本願だ」と言うとは否定的な印象を受けますが、仏教用語的には「あの人は他力本願だ」という表現は「あの人は信心深いので、既に救われている」という意味になります。日常会話や仕事上の会話で「他力本願」を安易に使ったり、誤用することは避けたいものです。

対義語的な仏教用語として「自力作善」という言葉があります。「自分の力で善を成し遂げようとする」「一人の力で善を成し遂げられると思うこと」等々の意味があります。

「他力本願」に生きるといふことは、欲や執着に囚われることを戒める仏教の教えを体得し、信心深く生きることで「既に救われている」ことになります。ではまた来月。



## お知らせ

今年、令和7年1月から、「手配り」は縮小しました。

「山門」にかわら版を入れた台を置きますので、ご自由にお取りください。

ご協力、よろしくお願いたします。

かわら版編集部：  
大塚耕平事務所 TEL 052 757 1955

